

晒加工から染色加工まで
一貫した生産体制を構築

新たに導入したスクリーン捺染機



大きな釜で炊き上げた和晒の生地



ロール捺染機

事業内容

創業以来、和晒を手がける

角野晒染は昭和6年の創業以来、木綿の生地から不純物を取り除き漂白する和晒を手がける。大きな釜で約28時間かけて炊き上げた生地を、全国の染色工場に出荷している。自動精練機で仕上げる洋晒の生地と比べ、和晒の生地は高い吸水性や通気性、保湿性を持つ。綿本来の風合いを保ち、肌触りが優しいのが特徴だ。

オリジナルブランドを立ち上げ

約40年前から手ぬぐいの染色も行っており、ロール捺染と呼ばれる技法を用いる。ほとんどの同業者が分業制を採用するなか、晒加工から染色加工まで一貫した生産体制を築く。この強みを生かそうと、ガーゼの寝間着も製造、販売。平成27年にオリジナルブランド「優柔～yu・ju～」を立ち上げ、百貨店などで販売している。

売上高は和晒の生地、染色した手ぬぐい、ガーゼ寝間着でほぼ3等分している。

補助事業

ロール捺染は大ロット向け

同社が染色する手ぬぐいは、法人の販促品や祭事の記念品向けが多い。これらの顧客ニーズは短納期、小ロット化の傾向にある。しかしロール捺染は数千枚単位の大ロット向けで、短納期、小ロットには向かない。当初、1,000枚以下の仕事は外注に頼っていた。

内製化の検討を開始

企業向けに1,000～2,000枚、小売店向けに100～1,000枚単位と小ロットの仕事が相次ぎ、合わせて月に2万～3万枚を占めるようになった。しかも「2週間でできますか」といった要望も少なくない。「これらに対応できないと、リピーターも来ない」と角野孝二社長は内製化の検討を始めた。

和晒を手がけ、漂白した生地が社内にあることは「いつでも染色できる」「納期に対応できる」という強みにつながる。新たにスクリーン捺染機を導入するのが最善と判断し、「ものづくり補助金」を申請した。

具体的成果

スクリーン捺染は小ロット向き

染色にはロール捺染、スクリーン捺染、手捺染、注染の4種類の^{ちゆうせん}方法がある。このうちロール捺染は金属製のロールに凹型の模様を彫刻した凹版による捺染方法。他の方法に比べ捺印速度が速く、機械による捺染の代表的存在だったが、型代が高価なことから大ロット向きとされている。

スクリーン捺染は布の上に版型を重ね、その上から捺染糊を布に印刷した後、蒸熱処理で仕上げる技法。染色原理が同じ手捺染よりも大量生産ができ、コストを低く抑えられる。型代や染色代から計算すると、約100～3,000枚の小ロット向きといえる。

生産枚数は2倍に

今回、スピードが速く、小ロットに向けたスクリーン捺染機を導入したことで、顧客ニーズがあるすべてのロット数に対し、社内に対応可能になった。角野社長は「100枚からできるのは大きい」と実感を含める。月平均の生産枚数も導入前の約2倍に増え、その大半を内製化した。手ぬぐいの繁忙期である夏から秋にかけて、平成30年はほぼフル稼働だった。さらに社内の体制を整え、月平均の生産枚数を導入前の約3倍に増やす計画だ。

今後の戦略

納期、コスト、生産量の競争力向上

スクリーン捺染については、全国でも類を見ない手ぬぐいの全加工工程の一貫生産工場になったことで、納期、コスト、生産量の面で競争力が向上した。「展示会で配布していた当社の資料を持ち帰ったお客さまから、『手ぬぐいをつくれますか』と直接問い合わせがくるようになった」と角野社長は手応えを感じている。

新しい商材を提案

今後は手ぬぐい、オリジナルブランド、和晒の生地を同社の事業の3本柱に据える。当面は既存顧客への販売促進を進める一方、大手小売業者や大手カジュアルウェア業者などにも新しい商材を提案していく計画だ。

期待できる市場は、一般消費者や企業向けに販促グッズとして使うオリジナル手ぬぐいや、インバウンド（訪日外国人）がおしゃれで手軽な土産品として購入する手ぬぐいなどが考えられる。

「若い人は手ぬぐいを見たことがない。50～60代の人は昔、使っていたが、いまはタオルがある。だから、さまざまな用途を開拓しないとイケない。その中から、思いもよらない使い方が見つかるかもしれない」と角野社長は強調する。

角野晒染 株式会社

代表取締役社長 角野 孝二

〒593-8322 大阪府堺市西区津久野町3-32-1

TEL. 072-262-0425 FAX. 072-263-3539

資本金/10,000千円 従業員/18名

主な取引先/繊維品卸売業、染色整理業、その他繊維製品製造業、川本産業、田村駒、エスピーリビング、興和、セルフ大西、他全国一円の間屋

主な保有設備/精練槽3台、ロール捺染機2台、スクリーン捺染機1台など

主力製品/和晒、手ぬぐい、ガーゼ寝間着

短納期 OK 小ロット OK オナーの技術 OK 量産 OK 試作 OK 連携力 OK

強みをさらに生かす

代表取締役社長 角野 孝二

角野晒染は一貫生産が強みです。晒や染めなど分業制の確立した業界の中で一貫生産は珍しく、納期やコストなどの面で競争力を発揮してきました。スクリーン捺染機の導入を機に、この強みをさらに生かしていきます。



取材を終えて

成長への道を切り開く

江戸時代から400年以上続く堺の伝統産業、和晒は「堺和晒」と呼ばれる。堺の石津川沿いには7軒の和晒工場があり、この7軒で日本の和晒の90%以上を生産している。和晒で仕上げた生地は優しくて柔らかい、ふんわりとした肌触りで、昔からガーゼや赤ちゃんの肌着、おしめなどに使われてきた。角野晒染は7軒のうちの一つ。オリジナルブランドのホームウェアなどさまざまな取り組みで、さらなる成長への道を切り開こうとしている。

<http://www.kadono-sarashi.jp/>